

平成

三年は未年です。羊は、「おとなしい」「柔順」「群れになる」などのイメージがありますが、何よりもわたしたちが実感できるのは、ウールのセーターや皮製品の肌ざわりと温かさです。

羊は紀元前六千ごろ、家畜化されたといわれています。馬が家畜化されたのが、紀元前三千、四千年ごろです。羊と人間の付き合いは、かなり長いことになります。

日本

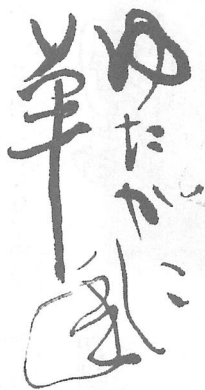
には、羊にまつわる諺(ことわざ)があまり多くありません。

すぐに思いつくところは、「羊の皮を着た狼」「羊頭狗肉」くらいのもです。曲がりくねった山道を「羊腸」と表現しますが、これはちよつと古臭い感じがしますね。では、なぜ羊に関する諺が少ないのでしょうか。西暦五九

今年 は 未 年

九年、推古天皇の時代に、百濟から二頭の羊が贈られたと、日本書紀に記されています。しかし、羊は乾燥した風土が好きなので、日本の気候に合

明治の初期、政府は綿羊の飼育振興を試みましたが失敗。その後、軍服などの製造のために、羊の飼育が奨励されました。また、戦後は農家の副業として、多いときは百



わなかつたのでしよう。あまり繁殖しなかつたようです。そのため、欧米のように諺が多くないのだらうといわれています。

さて、一年の計は元旦にある」といいます。今年の目標を決め、「迷える羊」にならないよう、スタートを切りた

羊毛は、天然繊維の人気上昇で、日本の需要が増えていきます。外国産が中心で、オーストラリアやニュージーランドなどから輸入しています。

文芸

俳句

ポストまで山茶花散りし石畳

海保 きみ

隙間風ちぎれて泳ぐ懐ぐ糸

勝又やすのり

組の音も忙しき年用意

鈴木 草庵

背に負ひし児の寝につかず冬の雲

鈴木 南知

作務僧の坂上り降り年用意

戸村 静華

ケーキの灯消す頬赤し聖夜かな

行方はじめ

紅葉散る奥庭深き蕎麦どころ

藤代 ゆう

ガイド旗指す山冬の雲

山口 一秋

山里や陽を浴び光る柿簾

若梅あやめ

着せ蓑に庭師の手際冬仕度

(選者) 土屋 栗水



短歌

露ふみて拾ふ山栗いくつかは栗
風の食みたるものも混じれり

掛川 友代

とぼとぼと浅草観音の人波を病
後の我はもまれつつゆく

向後 泰治

白きみ骨壺の半ばに満きざりき
九十六年生きたる媼の

斎藤 秀男

黄昏の近くに迫る畔の道水牛ひ
く女を広州に見つ

斎藤 要

浮き雲にはばまれながらも虹淡
く我が住む町の空にかかれり

斎藤 佳子

マンションの息づまるやうな生
活に慣れしか友の電話明るき

佐瀬 初音

走りゆく無蓋車の上のヒューム
管優しく夜の闇をいだけり

渋谷 静子

幾人の海女の面影顕たしめて船
は朽ちゆく潮騒の丘

津田 若菜

ひとつ詩に引かれ来たりし寒山
寺意外に小さき鐘を撞きけり

土屋 栗水

流れ込む生活汚水に湿原のほて
いあふひは猛猛と伸ぶ

(選者) 斎藤つね子